

# ヒンディー語を母語とする 日本語学習者の格助詞ヲの習得

## — 述語の他動性という観点から

チョーハン アヌブティ

### ◆要旨

**本** 研究では、ヒンディー語を母語とする日本語学習者の書記資料における格助詞ヲの誤用傾向を示すとともに、誤用の原因を述語の他動性というマクロ的な観点と母語転移というミクロ的な観点から分析する。

格助詞ヲの使用例を、(1) 動作が対象に及ぶ度合いと (2) 述語の格枠組みという他動性の側面を反映する述語階層によって分類し、それぞれの誤用率を調べた。その結果、学習期間を問わず、(1) が高ければ、誤用率が低く習得が容易である傾向が見られた。また、母語の影響が窺える誤用は、①両言語の格枠組みの不一致と②意志性の強弱に左右される場合があり、また、他動性の概念と関係なく、③同じ格標識が担う意味役割の多様さによる誤用もあった。特に①と③の誤用は、他動性が比較的低い述語カテゴリーに特に多かった。

### ◆キーワード

格助詞ヲ、他動性、ヒンディー語母語話者、母語転移

### ◆ABSTRACT

This paper presents an analysis of errors concerning the case particle 'wo' found in writing tasks produced by Hindi speaking learners of Japanese from the perspective of predicate transitivity and L1 transfer.

Both correct and erroneous usages concerning 'wo' were categorized into a hierarchy of predicates that reflects two aspects of transitivity: (1) affectedness of patient and (2) predicate's case frame. Calculating the error percentage for each category revealed that there was a positive correlation between the degree of (1) and ease of learnability irrespective of the length of learning period. Errors attributed to L1 transfer were influenced by ① differences in the case frame of predicates in Hindi and Japanese, ② agent's intentionality, and ③ the multiple semantic roles performed by the same case marker in Hindi. Errors ① & ③ were concentrated in predicates placed relatively lower in the hierarchy.

### ◆KEY WORDS

Case particle 'wo', transitivity, Hindi speaking learners of Japanese, L1 transfer

Acquisition of Case Particle 'wo'  
by Hindi Speaking Learners of  
Japanese  
From the perspective of predicate transitivity  
ANUBHUTI CHAUHAN

## 1 問題提起

日本語学習者にとって習得が難しく、誤用が頻繁に見られるものとしてしばしば挙げられるのが、格助詞である。格助詞に関する習得研究では、「ハ・ガ」、「ヲ・ニ」、「ニ・デ」、「ヲ・ガ」の混同が多く挙げられており、誤用傾向や習得順序、誤用につながる学習者ストラテジーなどが指摘されてきた（八木1996、杉本1997、今井2000、市川2010など）。

格助詞ヲに関して、「ヲ・ガ」の混同に関する記述には、「ガ+他動詞」、「ヲ+自動詞」の誤用を指摘したもの（杉本1997、坂口2004など）や動詞の自他と関係なく現れる誤用を指摘したもの（永井2015）がある。また、「ヲ・ニ」の混同に関しては、場所用法と対象用法の類似性を取り上げる先行研究が見られる（今井2000など）。しかし、先行研究の多くが、誤用の種類に焦点を絞ったものであり、誤用の出現を体系的に説明し、習得の難易度を予測する習得研究は少ない。さらに、ヒンディー語を母語とするインド人日本語学習者（HJL）の格助詞を焦点にした研究は、管見の限り Chauhan（2015）のみである。

Chauhan（2015）は、第二言語習得の分野にプロトタイプ理論を応用し、ある文法項目を学習する際に学習者はよりプロトタイプ性の高いものから習得していくという仮説を立て、HJLにおける対象を表す格助詞ヲとニの習得状況を調査した。その結果、「動作が対象に及ぶ度合い」が格助詞の選択に影響を与えていることを示した。即ち、受影性が高く原型的な述語カテゴリーにおいてはヲの誤用が最も少なく、原型から離れていくとヲ以外の助詞の誤選択が多くなる傾向が見られた。さらに、HJLの誤用は日本語ヒンディー語間における他動表現の格枠組みの不一致から生じているということが示唆された。しかし、調査方法は穴埋式テストであり、学習者の実際の言語運用を調査していないという問題点があった。そのため、HJLの書記資料における格助詞ヲに関する誤用及び正用を量的に分析し、母語転移の可能性も含め、格助詞ヲの習得過程を探る必要がある。

## 2 研究課題

具体的な研究課題は以下の3つである。

- (1) HJLにおける格助詞ヲの誤用傾向を明らかにする。
- (2) 格助詞ヲの誤用を「動作が対象に及ぶ度合い」という観点から分析する。
- (3) 母語転移の可能性が窺える誤用を予測し、どのような場合に起こりやすいのかを探る。

## 3 研究対象及び資料

本研究では、128名のHJLの書記資料（273編）における格助詞ヲの正用と誤用を分析対象とする。書記資料は、作文対訳データベース（以下、対訳DB）から抽出した作文、及びインドの日本語教育機関で収集したものである。対訳DBから抽出した作文は、学習期間12ヶ月～36ヶ月のヒンディー語話者40名によって書かれた67編である。インドで収集した書記資料は、日本語を主専攻としている大学生・大学院生（2～6年次、全87名）及び日本語学校の中級コースに所属する学習者（11名）に課された作文、手紙、内容理解問題の解答文、翻訳文、感想文、小論文の206編からなっている。データの概要を表1にまとめる。

表1 データの概要

群	学習歴（平均年）	書記資料数（編）	文字数（字）	総文数（文）
下位群（78名）	1.7	117	60,072	2,003
中位群（38名）	3.1	100	74,752	2,237
上位群（20名）	4.8	56	32,406	841

## 4 調査方法

学習歴を基に、下位・中位・上位の3群に分け<sup>[註1]</sup>、計273編の書記資料をテキスト化し<sup>[註2]</sup>、格助詞ヲの正用数と誤用数を調べた。誤用判定は筆者以外に、

大学院で日本語教育・言語学を専攻としている6名の日本語母語話者で分担して行った。分担は、一つの書記資料を2名の母語話者によって判定されるように行った。誤用の判定がずれた場合は、調査対象外とした。

#### 4.1 調査カテゴリー

HJLの正用・誤用を、共起する述語の意味タイプによって以下の9つのカテゴリーに分類した。

表2 調査カテゴリー

カテゴリー	説明	述語の例
1.作用	動作が対象に及び、かつ変化を起こす	殺す、作る、飲む
2.動作	動作が対象に及ぶが、変化を起こさない*	a.読む、やめる、(掃除を)する b.捨てる、使う、掃除する
3.知覚	感覚器官に与えられた刺激作用を通して、外界の事物・事象を掴む働きを示す	見る、聞く、見付ける
4.社会的相互作用	相手に向けられる動作・発言のような行為や授受関係を示す	褒める、頼む、話す 送る、与える、渡す
5.追求	対象を追い求める働きを示す	訪ねる、追う、待つ
6.知識	対象を理解し、認識する働きを示す	考える、忘れる、理解する
7.感情	気持ち・感情などのような心理的動きを示す*	a.愛する、疑う、安心する b.脅かす、喜ばす、引付ける
8.関係	所属・類似関係を示す	持つ、含む、(問題を)抱く
9.移動	通過点・経路・起点と移動の目標を示す	飛ぶ、通る、出発する

\*影響を受けるのが動作主(=主体)か、または被動作主(=対象)かによってさらに二分できる。

表2の調査カテゴリーは、世界の諸言語における述語の格枠組みを調査した角田(1991)の二項述語階層とMalchukov(2005)の二次元の階層に基づいたものである。角田(1991)は、形式的側面(=述語の格枠組み)と意味的側面(=動作が対象に及ぶ度合い)の両方を基準に、7つの類から構成される述語階層を提案した。類の並び順は、「直接影響(変化・無変化)」<sup>[注3]</sup>>「知覚」>「追求」>「知識」>「感情」>「関係」>「能力」という、より他動詞的な類からより自動詞的な類へと並ぶようになっている。言い換えれば、「直接影響(変化)」は他

動性が最も高く、原型的な他動詞とみなされるが、右へ行くほど動作が対象に及ばなくなり、述語の他動性が低くなっていく。

この階層は、動作主に関する意味側面と被動作主に関する意味側面を合成しているのに対し、Malchukov(2005)の下位階層は、この二つの特徴を区別した、二次元的なものである。上の下位階層は、他動詞目的語の「被動作主らしさ」が右へ行くほど下がり、「直接影響(変化)」(=作用)>「接触」(=動作(対象))>「追求」>「移動」の順になっているのに対し、下の下位階層は、他動詞主語の「動作主らしさ」が右へ行くほど下がり、「直接影響(変化)」(=作用)>「被影響動作主」(=動作(主体))>「知覚」>「知識」>「感情」の順になっている。また、角田の階層にはない「社会的相互作用」は、「動作主関係」と「被動作主関係」の両方の特徴を示すため中央に位置づけられ、「関係」は扱われていない。

本稿では、Malchukov(2005)の下位階層に従い、表2に示した調査カテゴリーにおける動作が対象に及ぶ度合いを以下の図1のように捉える。なお、「関係」については、意味側面を「動作主関係」と「被動作主関係」に明確に区別することが難しいため、「被動作主関係」と同様に、中央に位置づけた。さらに、「感情」については、感情述語の経験者が被動作主か主体かによって、「感情(対象)」と「動作(主体)」に二分した。

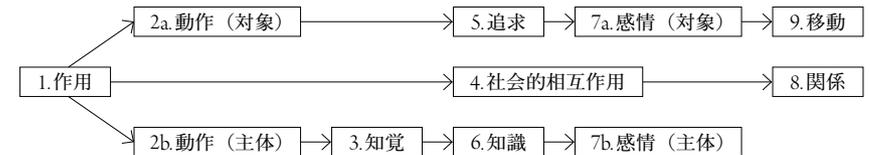


図1 調査カテゴリーにおける受影性の度合い

#### 4.2 誤用の予測

##### 4.2.1 動作が対象に及ぶ度合い

Chauhan(2015)の結果を援用し、上記の階層を言語習得に対応させると、動作が対象に及ぶ度合いの強さに相関して学習者における格助詞ヲの習得が容易になることが予測される。即ち、「被動作主関係」の下位階層では、「1.作用」

> 「2a.動作 (対象)」 > 「5.追求」 > 「7a.感情 (対象)」 > 「9.移動」の順に習得の度合いが低くなっていき、「動作主関係」の下位階層では、誤用率が、「1.作用」 > 「2b.動作 (主体)」 > 「3.知覚」 > 「6.知識」 > 「7b.感情 (主体)」の順に低くなっていくことが予測できる。また、「4.社会的相互作用」と「8.関係」に関しては、前者は誤用が比較的少ないことが予測できる。

#### 4.2.2 母語転移

母語転移が原因と思われる誤用として、①両言語における述語の格枠組みの不一致、②両言語における意志性の違い、及び③「ko」が担う意味役割の多様さの3つに関わる誤用が考えられる。それぞれについて以下で説明する。

①両言語における述語の格枠組みの不一致：ヒンディー語は、日本語と同様にSOV型言語であり、日本語における助詞の文法機能を名詞に後接する接語が果たしている。また、日本語における典型的他動詞構文「N<sub>1</sub>+が N<sub>2</sub>+を V」に対応するヒンディー語の構文は「N<sub>1</sub>+ $\phi$  N<sub>2</sub>+ko V」であり、対象を示す格標識 (=対格) はそれぞれ、格助詞ヲと接語「ko」である。ただし、述語によっては、片方の言語だけで他動詞構文を取り、もう片方では他動詞構文を取らないという例も多く、学習者が混乱しやすい。例えば、日本語のヲに対応する接語は、対格の「ko」以外に、主格の「 $\phi$  (無標示)」、具格・奪格の「se」、所格の「par・me」、属格の「k」などと様々であり、「太郎が花子に (→を) 信じた」のような誤用が予測できる。反対に、ヒンディー語の「ko」に対応する格助詞は、ヲ、ニ、ニツイテなどであり、「将来を (→に) 影響する」のような誤用が予測できる。

②両言語における意志性の違い (意志性の強弱)：角田 (1991) の述語階層に基づき、両言語における典型的他動詞構文を比較すると、日本語では、意志性の強弱と関係なく、他動性の高い出来事を描写するために使用される典型的な他動詞構文が「関係」まで使用される。その一方、ヒンディー語では、意志性が重要な要因であるために他動詞構文で表現されるものが日本語ほど広くはなく、他動詞構文が「知識」まで使用される。即ち、日本語では、意志性は自動詞文と他動詞文を区別するものではなく、「日焼けを嫌う」や「勇気を持つ」のような他動詞表現が可能である (角田 1991: 86)。それに対し、ヒンディー語で

は、意志性が典型的な他動詞文に反映し、無意志動詞は他動詞にならない (Pandharipande 1981, Mohan 1992, パルデシ 2007)。そのため、HJLは意志性の強弱に左右されやすいことが予測できる。このような要因から起こる誤用は、母語では典型的な他動詞構文にならないために、母語の格標識に影響されて起こる誤用と、母語の格標識と関係なく、文脈上意志性が読み取れないために「×が→○を」が出現してしまう誤用の二つに分けられる。前者は上記の①で、後者は②で取り上げることにする。

③「ko」が担う意味役割の多様さ：接語「ko」は、対格のみならず、与格も示している。与格としての意味役割は、「受領者」、「経験者」、「必要・願望や義務を表す文の動作主」の3つである。従って、「ko」は、対象のヲ、ニ、ニツイテ以外に、受益者・授与者・動作の相手のニ、動作主のガなどにも対応しており、「太郎が二郎 $\boxed{\text{を}}$  (→に) 本をあげた」、「太郎 $\boxed{\text{を}}$  (→が) お腹がすいた」や「花子 $\boxed{\text{を}}$  (→に) この本が必要だ」のような誤用が予測される。

## 5 調査結果

全調査対象者の総誤用数・総正用数を基に、上・中・下の3群に分けたところ、表3の結果となった。なお、表中の誤用率は、ヲの総使用数 (正用数と誤用数の合計) に対する誤用数の割合を示している。

表3 格助詞ヲの正用数と誤用数 (誤用率)

	上位群	中位群	下位群	総数
使用数	557	1255	994	2806
正用数	511	1105	855	2471
誤用数 (誤用率)	46 (8.25%)	150 (11.95%)	139 (13.98%)	335 (11.93%)

下位群では格助詞ヲの誤用率が最も高く、中位群では少し下がり、上位群ではさらに下がっていたが、学習期間が長い上位群においてもその割合はおよそ8%と高かった。

次に、HJLにおける誤用をヲ使用による誤用 (混同と誤追加) とヲ不使用による誤用 (混同と脱落) に分け、誤用数が10例以上観察された誤用を表4に示す<sup>[註4]</sup>。

表4 種類別誤用数（誤用率）

誤用の種類	上位群	中位群	下位群	総合
×ヲ→○ニ	11 (1.97%)	34 (2.62%)	26 (2.62%)	71 (2.53%)
×ニ→○ヲ	9 (1.61%)	14 (1.11%)	15 (1.51%)	38 (1.35%)
×ヲ→○ガ	3 (0.53%)	25 (1.99%)	20 (2.02%)	48 (1.71%)
×ガ→○ヲ	8 (1.43%)	26 (2.07%)	12 (1.21%)	46 (1.64%)
×ヲ→○φ	- (0.00%)	5 (0.39%)	2 (0.20%)	7 (0.24%)
×φ→○ヲ	4 (0.71%)	18 (1.43%)	17 (1.71%)	39 (1.39%)
×ヲ→○ノ	1 (0.17%)	2 (0.15%)	2 (0.20%)	5 (0.17%)
×ノ→○ヲ	3 (0.53%)	11 (0.87%)	9 (0.90%)	23 (0.82%)
×ヲ→○ト	1 (0.17%)	1 (0.07%)	5 (0.50%)	7 (0.24%)
×ト→○ヲ	1 (0.17%)	3 (0.23%)	8 (0.80%)	12 (0.42%)
×ヲ→○ハ	- (0.00%)	1 (0.07%)	3 (0.30%)	4 (0.14%)
×ハ→○ヲ	2 (0.35%)	2 (0.15%)	4 (0.40%)	8 (0.28%)

HJLの誤用は、複数の助詞に分散しているが、割合の高い順に挙げると、「×ヲ→○ニ (2.53%)」>「×ヲ→○ガ (1.71%)」>「×ガ→○ヲ (1.64%)」>「×φ→○ヲ (1.39%)」>「×ニ→○ヲ (1.35%)」>「×ノ→○ヲ (0.82%)」であった。

## 6 動作が対象に及ぶ度合いとの関係

以下の表5-1～5-3は、HJLの誤用率を調査カテゴリ別にまとめたものである。表5-1は、「動作主関係」の下位階層であり、「動作が対象に及ぶ度合い」の高いカテゴリから順に並べられている。

全体的には、調査カテゴリを正用率の高い順から並べると、「作用」>「動作 (主体)」>「知覚」>「感情 (主体)」>「知識」の順になっており、予測通りの結果であった。ただし、3群別に見てみると、予測した順序とのずれも見られた。具体的には、「作用」と「動作 (主体)」の差が全体的に極めて少なく、中位群では逆の順になっていた。また、「知識」と「感情」にも同様の傾向が見られ、上・中位群では、「知識」の誤用率が「感情」より高かった。

表5-1 「動作主関係」の下位階層

	上位群		中位群		下位群		計	
	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用
作用	114	6 5.00%	200	15 6.97%	201	13 6.07%	515	34 6.19%
動作 (主体)	103	6 5.50%	259	16 5.81%	148	13 8.07%	510	35 6.42%
知覚	25	*	82	12 12.76%	135	13 8.78%	242	25 9.36%
知識	36	2 5.26%	59	22 27.16%	22	12 35.29%	117	36 23.52%
感情 (主体)	21	1 4.54%	38	9 19.14%	9	11 55.00%	68	21 23.59%

\* 今回の調査では用例が見られなかったことを意味する（以下同様）

表5-2 「被動作主関係」の下位階層

	上位群		中位群		下位群		計	
	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用
作用	114	6 5.00%	200	15 6.97%	201	13 6.07%	515	34 6.19%
動作 (対象)	85	6 6.59%	223	25 10.08%	146	12 7.59%	454	43 8.65%
追求	9	3 25.00%	12	-	12	2 14.28%	33	5 10.81%
感情 (対象)	-	-	13	-	15	5 25.00%	26	5 16.12%
移動	8	3 27.27%	26	6 18.75%	23	8 25.80%	57	17 22.97%

表5-3 中央に位置づけられるカテゴリ

	上位群		中位群		下位群		計	
	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用	正用	誤用
作用	114	6 5.00%	200	15 6.97%	201	13 6.07%	515	34 6.19%
社会的相互作用	51	10 16.39%	143	27 15.88%	102	22 17.74%	296	59 16.61%
関係	48	4 7.69%	42	3 6.66%	37	8 17.77%	127	15 10.56%

中位群における「作用」と「動作(主体)」のずれは、「作用」に関する誤用の特徴と、「動作(主体)」に関する正用の特徴に起因していると考えられる。下位群の誤用のおよそ半数が「吸う」に関する誤用であったのに対し、多様な述語を使用していた中位群の誤用は「吸う(3例)」以外の述語も多く、誤用が増加していた。また、「作用」では正用数・誤用数には大きな差がなかった一方、「動作」の正用数が上・下位群のおよそ2倍(259例)と多かった。この259例のうちおよそ6割が「勉強をする」、「仕事をする」などのように「VNを+する」形のサ変動詞であった。さらに、「VNを+する」に関する誤用が非常に少なく、使用が定着していたことは「作用」に比べて誤用率が低い要因の一つと考えられる。

「知識」においては、中位群に見られる「N<sub>2</sub>を分かる」の誤用が11例と多く、他のカテゴリと違って同一述語に集中していたことが特徴的であった。

一方、「被動作主関係」の下位階層の場合は、予測通りの結果であった。

全体的には、正用率の高い順から並べると、「作用」>「動作(対象)」>「追求」>「感情(対象)」>「移動」の順になっていた。また、下位群でも同傾向が見られ、上位群では、感情を除き、予測通りの結果であった。だが、中位群においては、「追求」と「感情(対象)」に対する使用例が少なく、誤用例が見られなかった。これに関しては、回避の問題も考えられるために判断が難しいと思われる。

Malchukov(2005)の図の中央に置かれる「社会的相互作用」と「関係」のカテゴリでは、下位群における正用率は、「作用」>「社会的相互作用」>「関係」の順になっていた一方、中位群と上位群においては「関係」の誤用がかなり少なかった。

このずれの原因として、「関係」に分類された述語の種類の少なさ<sup>[註5]</sup>及び「社会的相互作用」における受領者に関する誤用(19例)の多さが考えられる。「関係」に分類された述語はわずか7つであり、総正用数のおよそ8割が物理的・抽象的所有関係を表す「持つ」であった。誤用数も「持つ」に偏っており、全体のおよそ半数を超えていた。下位群では「×ガ→○ヲ」の誤用が多く見られたものの、上・中位群ではわずか1例ずつと少なかった。それに対して、「社会的相互作用」では、母語の負の転移が原因と思われる、間接目的語を示すニの代わりにヲを選択してしまった誤用(詳細については72節参照)が中位群においても多く見られたことから、習得の停滞の様子が窺えた。

以上より、「動作が対象に及ぶ度合い」が高いカテゴリは比較的習得しやすいと言える。これは概ね予測通りの結果であった。特に下位群では、それぞれの調査カテゴリの誤用率が「動作が対象に及ぶ度合い」をそのまま反映していた。

用例が観察できなかったカテゴリもあり、ずれも見られたが、ずれが見られたカテゴリでは、誤用の多くが同一述語に集中的に出現していたことや、述語の種類が少ないこと、または母語転移などが影響したと思われる。

## 7 母語転移について

以下では、母語転移の可能性が窺える誤用(全誤用(335例)のうちの114例)に対して、4節に挙げた3つの観点から考察を行う。

### 7.1 両言語における述語の格枠組みの不一致

母語と日本語における述語の格枠組みに一对一の対応関係が見られない場合に誤用が生じやすくなると考えられるが、このような誤用は「動作が対象に及ぶ度合い」が比較的高いカテゴリ(「作用」、「動作」、「知覚」、「知識」)には少なく、「動作が対象に及ぶ度合い」が比較的低いカテゴリ(「社会的相互作用」、「感情」、「関係」)にはより多く見られた。

「作用」で誤用(4例)が見られた述語は、ヒンディー語では「N<sub>1</sub>+主格-N<sub>2</sub>+所格」を取る述語であり、あるプロセス・行為を妨げることを意味するものであった。また、「動作」の誤用(5例)の中には、「×デ→○ヲ」や「×ノ→○ヲ」の誤用がそれぞれ2例あった。前者は、「肺がんで(→を)患う」と「病気で(→を)こうむる」のように、母語では原因を示す接語「se」が用いられる述語であり、後者は、「問題の(→を)解決する」と「全ての(→を)用意しておく」のように、母語では「N<sub>1</sub>+主格-N<sub>2</sub>+属格」を取る述語である。また、「知覚」と「追求」に関する誤用は見られなかった。

1. そして、言語は夢を達することに妨害しない(ように)政府は大きな対策を取った方がいい。(作用、上位群)
2. 1998の調査を見るとデリーだけでは大勢の人々が肺臓と心臓の病氣でこ

うむっています。(動作、下位群)

3. 旅に出る前にお母さんは皆のために全ての用意して (→全ての用意をして・全てを用意して) おきました。(動作、中位群)

一方、「動作が対象に及ぶ度合い」が比較的低いカテゴリでは、母語転移が窺える誤用が比較的多かった。「感情」の誤用(14例)は、「人と(→を)愛する」と「人に(→を)信じる」に集中的に現れ、それぞれはヒンディー語では共格の「se」と所格の「par」で標示される。「関係」の誤用(6例)は全て「N<sub>2</sub>+が(→を)持つ」に関するものであり、ヒンディー語では自動詞構文を取る。また、「社会的相互作用」の誤用(7例)のうち、「手伝う」に関する誤用が3例見られた。

4. Raj Malhotraは一つの彼女と愛しています。彼女もRaj Malhotraと愛しています。(感情、下位群)
5. 日本人はある思想を取り入れるとき、心から耳っていないような意見が若者が持っている。(関係、上位群)
6. 勉強ができない学生の他の分野にある興味を見付けて技を磨くことに手伝えるのは良い先生の責任だと思います。(社会的相互作用、下位群)

## 7.2 意志性の強弱について

述語の格枠組みの不一致という形式的な相違に関する誤用と異なり、文脈から動作主の意志性が読み取れるか否かという意味的側面に関する誤用が26例観察された。誤用例の文意や述語の語彙的意味に焦点を当てると、「×ガ→○ヲ」の46例のうちの24例は、動作主の意志性・コントロール性が低い、思考・感情・受身的動作や可能性を示すものである。「×ハ→○ヲ」の誤用も数例見られた。

7. 寮で住んでから、今両親のありがたさやお金の価値などが分かります。良い点として、今お金の管理、つまりお金を貯金するのが習いました。(動作、下位群)

8. 紫式部は子供のころ母を失いましたが、後で姉を失いました(略)信長と結婚しましたが、二年ばかりで、信長は死にました。紫式部は自分の生活(で)たくさん(の)ことが体験しました。(動作、中位群)
9. 一つが達することができないともう一つはあると思う。(作用、上位群)
10. ある日歩いてとき一つのパンがふと見付けました。(知覚、下位群)
11. 良いことと悪いこととの違はよく理解できるから。<sup>[注6]</sup>(知識、下位群)
12. 外の社会が怖がっているからだと思う。(感情、中位群)

例7~9の場合は、同一学習者によって以下のような正用例が産出されており、学習者の誤用は、述語が取る助詞に関する知識の有無に影響されていることは考えにくい。

7. 一人で住むと、どこへ行くときや何かをするとき、注意しています。キャンパスに住んでから、始めて銀行などのことを習いました。
8. 主人公の「かぐや姫」は、この社会に育てられ、地上の現実を体験し、また月の世界に戻ったのである。
9. 日本の若者は何か目的を狙うと、それを一所懸命に達すると思う。

7では、自然な成り行きの中、貯金する習慣が身についたというニュアンスがあるのに対し、7'では、生活上の様々な側面に注意を払い、能動的に銀行でのやりとりを調べている読みが生じていると思われる。同様に、8も受身的な行為であるが、8'は選択的な行為であると言える。また、9は、可能表現であり、意志的な行為ではないのに対し、9'は、動作主による意志的な行為である。即ち、受影性が高く意志性が読み取れる文ではヲが使用されやすいが、意志性が読み取れない場合には、受影性を問わず、ガまたはハを使用してしまう傾向があるのである。このような誤用は、ヒンディー語と同じく、南アジア諸言語に属するシンハラ語母語話者にも見られ(永井2015)、意志性という概念を重視する南アジア諸言語を母語とする学習者に共通する問題である可能性が窺える。

### 7.3 「ko」が担う意味役割の多様さ

ヒンディー語における対格と与格は同形であり、HJLにとって目的語と間接目的語の区別や動作が向けられる対象と動作が向けられる相手の区別が難しいことが原因で、「×ヲ→〇ニ」の誤用が起きやすいと予測した。今回の調査データにおいては、このような誤用が29例と多かった。

「社会的相互作用」は、「言語行動 (12例)」、「授受関係 (10例)」と「社会行為 (7例)」に分類でき、それぞれの例文として次のものが挙げられる。

13. よだかは鷹<sup>を</sup>「改名より死んだほうがいい」と答えた。(中位群、言語行動)
14. たばこは環境<sup>を</sup>書を与えます。(下位群、授受関係)
15. 柏木は源氏物語の正妻の女三<sup>を</sup>求婚しました。(中位群、社会行為)

上記のような誤用の中、「授受関係」と「言語行動」の誤用は、従来の先行研究では指摘されておらず、HJLのみに見られる特徴である可能性が高い。

以上、母語転移の可能性が窺える①両言語における格標識の不一致が原因と思われる誤用(「×ニ→〇ヲ」等)、②文脈上、意志性が無いと判断された場合に出現しやすい誤用(「×ガ→〇ヲ」)、及び③「ko」が担う機能の多様性が原因と思われる誤用(「×ヲ→〇ニ」)に対して考察を行った。①と③は、他動性が比較的低いカテゴリーに集中しており、母語の形式に影響される誤用であると言える。一方、②は、文脈上、動作主の「意志性」が読み取りにくい場合に多く観察され、概念的転移として捉えることができる。

## 8 おわりに

以上、HJLの格助詞ヲの誤用を下位、中位、上位群別に考察した結果、「ヲ・ニ」の混同が「ヲ・ガ」の混同を上回り、「×ヲ→〇ニ」の誤用が3群ともに多く観察された。このような誤用は、述語の他動性と母語転移の観点から説明できる。

本稿で取り上げた他動性に関する側面は、(1) 動作が対象に及ぶ度合いと(2) 意志性の強弱という意味的側面と(3) 両言語の格標識という他動性の形式的側面である。「動作が対象に及ぶ度合い」と誤用の関係については、調査カテゴリー別に誤用率を調べた結果、「動作が対象に及ぶ度合い」の低い順に誤用が多い傾向が確認できた。

また、全誤用のおよそ三分の一を占める母語転移に関わる誤用は、「(1) 動作が対象に及ぶ度合い」のみならず「(2) 意志性の強弱」にも左右されることが特徴的であった。①の誤用に関しては、(1) が低い場合には両言語の格標識の不一致による誤用が出現しやすく、(1) と(2) の両方が低いカテゴリーにおいては特に多かった。その一方、②の誤用では、文脈上、意志性が無く文全体の動作性が低いと判断された場合は、(1) が高い述語においても「×ガ→〇ヲ」は出現してしまい、HJLが(2) を優先することが窺えた。要するに、(1) と(2) の意味側面を持つ他動性は、大まかな使用傾向を決定するマクロ的要因であるのに対し、母語転移は、助詞・接語の非対称性や個々の述語という語彙レベルで働くミクロ的要因であると考えられる。

今回の調査では、「感情(対象)」と「追求」の使用数が少なく、「関係」の使用数のほとんどが「持つ」という動詞に偏っていたため、使用回避の可能性が窺われ、使用実態が明らかにされているとは言にくい。このようなカテゴリーについて検討するためには、データの収集方法を改良する必要がある。また、具体的な指導方法を提案することや、Chauhan (2015) で実施された文法テストの結果と今回の調査結果の関係を明らかにするといった点は今後の課題としたい。

〈筑波大学大学院生〉

#### 注

- [注1] …… 下位、中位、上位群の学習期間は、それぞれ12～28ヶ月、30～48ヶ月、52～72ヶ月であった。
- [注2] …… 本研究で注目するのは格助詞「を」という文法項目であるため、表記に関する誤りは分析対象から除外した。また、検索がかけやすくなるように、漢字・送り仮名などの統一も行った。

- [注3] …… 「直接影響」は、動作が対象に変化を起こす「変化」(＝作用)と対象に変化を起こさない「無変化」(＝動作)に二分される。Malchukov (2005) では、「直接影響 (無変化)」は、さらに「接触」(「動作 (対象)」)と「被影響動作主」(「動作 (対象)」)に分けられる。
- [注4] …… 表4に示した誤用以外に、「×デ→○ヲ (6例)・「×ヲ→○デ (3例)」、「×カラ→○ヲ (2例)・「×ヲ→○カラ (1例)」と「×複合助詞→○ヲ (9例)・「×ヲ→○複合助詞 (5例)」も見られた。
- [注5] …… 「関係」に分類された述語の異なり数が全体で7つであるのに対し、「社会的相互作用」に分類された述語の数は43であった。
- [注6] …… この例文は非文と判断しにくい、文脈においては、ヲのほうが適切であると判定された。文脈は次の通りである。「少年ためにはそんなことが必悪です。しかし大人にはちょっと…。良いことと悪いこととの違いはよく理解できるから。」

## 参考文献

- 市川保子 (2010) 『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク
- 今井洋子 (2000) 「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得—「精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から」『日本語教育』105, pp.51–60. 日本語教育学会
- 坂口昌子 (2004) 「日本語学習者が生成する格助詞「が」「を」の誤用とその修正について—作文データからみた母語別誤用傾向」『研究論叢』63, pp.65–75. 京都外国語大学
- 杉本妙子 (1997) 「格助詞「を」をめぐる誤用—分類と分析」『茨城大学人文学部紀要コミュニケーション学科論集』1, p.31–50. 茨城大学人文学部
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 永井絢子 (2015) 「スリランカ人日本語学習者の格助詞の習得—シンハラ語母語話者の作文に見られる「ガ」を中心に」『日本語教育』161, pp.31–41. 日本語教育学会
- パルデシ、ブラシャント (2007) 「他動性の解剖—「意図性」と「受影性」を超えて」『他動性の通言語的研究』pp.179–190. くろしお出版
- 八木公子 (1996) 「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序—助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に」『世界の日本語教育』6, pp.65–81. 独立行政法人国際交流基金
- Chauhan, A. (2015) Acquisition of the Japanese Object Case Particle “wo” by Adult Hindi Speakers: Testing the Transitivity-scale of Two-place Predicates. *International Journal of Language Education & Applied Linguistics*, 3, pp.25–35.
- Malchukov, A. (2005) Case pattern splits, verb types and construction competition. In M. Amberber & H. Hoop (Eds.) *Competition and Variation in Natural Languages: The Case for Case* (pp.73–117). London and New York: Elsevier.
- Mohanani, T. (1992) *Argument Structure in Hindi*. Stanford, CA: CSLI Publication.
- Pandharipande, R. (1981) Transitivity in Hindi. *Studies in the Linguistic Sciences*, 11(2), pp.161–179.